

刑務所の中に 言葉の可能性がありました

作家の寮美千子^{りやうみちこ}さんは、2007年から9年間、奈良少年刑務所の少年たち186人に「絵本と詩の教室」を行ってきました。

教育者でもなく刑務所関係者でもない寮さんが、なぜそんな経験をすることになり、そこで何が起きたのか。全3回でお届けします。

取材・文＝岡島文乃（編集部） イラストレーション＝サイトウマサミツ

実にひよんな出会いでした。

14年前、神奈川から奈良に越してきて間もない頃、夫と二人あちこち自転車走らせていたときに見た、赤レンガの壮麗な建物。それが奈良少年刑務所で、近代建築ファンの私はひと目で魅せられました。でも中には絶対入れない……そう思っていたら、2か月後、年に一度の「矯正展」が開かれるといいます。刑務所製品や作品を一般に向けて販売・展示する会だと知って、さっそく出掛けました。

体育館に展示された絵や陶芸作品、詩、俳句はどれも繊細な出来栄で、「振り返りまた振り返る遠花火／夏祭り胸の高まり懐かしむ」という句に私は立ち止まってしまいました。しかしこれを書いた子も何か重い罪を犯したのです。戸惑いながらも私は思わず、そこにいた刑務所の教官に「こうした句を、彼らに声に出して読んでもらってください。きっといい効果があります」と話しました。私は絵本や詩を書きます。長い間ラジオに、

